

分科会の記録 <特別 I 分科会 特別課題>

【講演講師】放送大学教授 博士（情報学） 中川 一史 氏

【講演】

新たな生活様式に基づく学校の取組と GIGA スクール構想における副校長や教頭の役割

【協議の柱】新たな生活様式に基づく学校の取組と GIGA スクール構想における副校長や教頭の役割

【講演内容】

今年度は、「GIGA 元年」としてより積極的に ICT を活用した学習場面を取り入れていくようにする。（※ただし、日本の教師の優秀さが ICT の活用の妨げとなっていることもある。）

① 教育の情報化促進のカギは、「環境—制度—スキル—活用」の一連の関係がある。

◎ 環境 常時一人 1 台環境への移行

→ 3 クラスに 1 クラス分の実現

→ GIGA スクール構想

→ BYOD の普及 など

◎ 制度 必須化、法整備

→ 学習指導要領の改訂

→ デジタル教科書の法制化

→ プログラミング教育の充実 など

◎ スキル 教員の授業方法の改善

→ 児童生徒の主体性に応じた授業の改善

例えば）国語→話し合い方のモデル映像としての活用、フォトポエム（映像と詩の融合）

社会→大きなデジタル模造紙として活用（1 枚の大きな地図を学級で作成）

児童生徒の活用スキルの向上

→ 情報活用能力の向上

→ 脱・新奇性（子どもがパソコン活用の目新しさを感じないくらい使う）

→ ツールとしての選択の拡大（鉛筆やノートなどの学習用具と同じようにパソコンも当たり前のツールとなる）

◎ 活用 効果的な活用

→ 活用場面

→ 効果検証

② ICT の「学び」への活用については、探究のプロセスにおける様々な場面において ICT を効果的に活用できる。（課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現）

③ GIGA スクール構想が実現する「7つの脱」がある。（脱・一斉授業オンリー、脱・授業場面オンリー、脱・即時効果の追究、脱・共有物、脱・対面授業オンリー、脱・ツールの固定化、脱・機能の固定化）

④ ICT 活用のメリットには 3 つの「超」7 つの「しやすさ」がある。（「超原型」試行錯誤がしやすい、加工・編集できる、「超空間」リアルタイムに使えること（超座席）双方向であること（超教室）、「超時間」保存可能である、履歴が活用できる）（1：書きやすい・消しやすい、2：動かしやすい・試しやすい、3：共有しやすい・連動しやすい、4：大きくしやすい、5：繰り返しやすい、6：残しやすい、7：説明しやすい）

分科会の記録 <特別 I 分科会 特別課題>

⑤ GIGA スクール後の選択を学校、教育委員会などが連携して考える。

ケース 1 : 自治体による機器更新 ケース 2 : 朽ち果てるまでそのまま

ケース 3 : BYOD (Bring Your Own Device) 欧米式→家にあるものを持ってくる

日本式→同じ機種を保護者に指定する

⑥ 学校マネジメントの必要性が… 多様化する教育ニーズや学校独自性の要求

教職員が気持ちよく働ける学校への転換→校長・教頭の軽やかなリーダーシップ、学校自らマネジメント体制の確立・整備→教職員の意識改革による主体的な取り組みと新しい時代に即した学校の教育力の向上

最後に ICT の活用効果は $y = x^2$ である。最初はルールの浸透など苦労するが、いずれグッドプラクティスの共有ができるようになる。これが教職員の働き方改革にきつとつながる。また、「ICT 活用」に慣れることが大事であるということを管理職が教職員に伝えていき、学校全体でいろいろな事例を学び、深めていく。

【グループ協議 報告】

① GIGA スクールの現状と課題

○毎月授業で使うようにしている、学校行事で使っている、オンライン授業で使った、また、職員の研修で使う等の状況が見られた。熊本県高森町では 10 年前から ICT 活用の推進を行い、一人 1 台のタブレットがある。10 月には公開授業を計画されている。校務支援ソフトの利用で効率化が図られている。

○いろいろな課題も浮き上がっている。

・授業の中では…タブレットとノートの活用の仕方をどう分けていくか、机上に学習道具があふれてしまい現状の机の広さでは狭い、もしかしたら ICT 機器を使いこなすだけで授業が深まっているのか疑問である など

・管理について…自宅で管理する。充電等も自宅で行う。一方では学校で管理している。管理については児童生徒が使うときのルール、故障した際に誰が補償するのか、セキュリティなどガイドラインの中身をどのように作っていくのか、また、誰（例えば教育委員会等）がリードして作成するのか課題がある。 など

・職員間の温度差がある。ICT 機器が苦手な教員がいる。(主にベテラン教員)

② 今後の方向性

○校内で ICT 活用が得意な教員と苦手な教員が互いに交流できるように研修を行っていく。教職員同士のコミュニケーションが土台となる。管理職はその推進役としてみんなのモチベーションを上げる事が必要である。

○学校のみでは GIGA スクールの推進は難しい。例えば、学校では、ICT 活用の推進・GIGA スクールの推進、定期的に効果的な活用の推進に向けた研修の開催を行う。県や市町村の教育委員会等では、学校 ICT 教育推進のサポート、ICT 活用の Q&A やガイドラインの作成を行う。このように組織として GIGA スクール構想の実現を目指していく。

○ICT 活用も必要であるが、アナログの良さも両方理解して取り組むことも必要である。職員間の連携がよりできる。

○中川先生の講演を受けて、タブレット活用的手段と目的をきちんと明確にして、教職員が理解して使う事が重要である。そうではないと ICT 活用の効果は $Y = X^2$ となっていけない。

☆副校長・教頭は ICT 危機を使いやすくするように校内環境の整備、行政への働きかけ等を行い、多くの教員の意見を吸い上げながら士気を高め、勇気と強い意志を持って進めていきたい。